

T・B・ヴェブレン方法論の論難

浜崎 正規

序

経済学史家が制度学派 Institutionalism とよぶ場合、T・B・ヴェブレン (Thorstein Bunde Veblen 1859～1929) に起点をもとめるのがつねのようである。けれどもアメリカ経済学の生成発展過程への影響的な位置づけの当否をめぐる彼ヴェブレンについての経済思想的考察は、あまりにも看過されすぎてきたことは否めない。E・ハイマン (Eduard Heiman) にしても、ヴェブレンの経済思想を評するに、まちがいがなくもアメリカ的—いわば哲学の領域で、アメリカがなした独創的な寄与であるあのプラグマティズム Pragmatism の嫡流 (thelegitimate offspring) としての制度学派を、アメリカ的地盤のもとに創始した意味で——

な役者として位置づけるにしても、彼の思想構造の体系的分析を試みることによってなされたのではなかった。

(“History of Economic Doctrine: An Introduction to Economic Theory”, 1951, VII History and Institutionalism, pp. 177—183)

試みにわれわれは、J・A・シュムペーター (Joseph Alois Schumpeter) にしたがって制度学派の立場を解釈してみらなれば、 (“Ten Great Economists; From Marx to Keynes, 1952, 9. Welsey Clair Mitchell (1874—1948) p. 247) まづ二つの運動曲線——しかも二つの面の交線としての——によって把握できるであらう。すなわちその一つは環境の情勢——眼前の情態に対する懷疑——結果的にはいわば論理の厳しみの疑惑。いいかえれば論理の非現実的な「要請」の明確

化。ひいては「先入見」（イデオロギー）の抽出的廃棄。その二つは論理の「要請」の政治的偏見、形而上学的信念の捨象がそれである。ところでシュムペーターが彼なりに理解する制度学派の態度がそうであるならば、すなわちこれら二つの運動曲線の経済思想的認識が、充大な意味での制度学派の理解と考えられるならば、一体それら各各の曲線面を色づけている思想的契機・根拠は何であるか。次にそれらの運動曲線を立て、オートノミーな経済思想の形成 \parallel 経済原理の擁立にいたらしめる源泉は何か、という問題提起が炎上してくるであろう。この炎こそまさしく最近のアメリカ経済学者達の間で燃えかかっているようにうかがえる。このことは以下ここに紹介しようとするA・W・ローツ（A. W. Coats）教授の論稿もふれている

のであるが、マリィランド大学（University of Maryland）の経済学の教授A・G・ゲルッチー教授（Allen G. Gruchy）の「近代経済思想」（“Modern Economic Thought”, The American Contribution”,

1947, chapter 2 : The Institutional Economics of Thorstein Veblen, pp. 31—132）が問題のともじびをかかげたように考えられる。

ところでゲルッチー教授は、冒頭において次のように評した。すなわち「一九世紀の末期における経済科の再建に深く興味をひかれた経済学者達（R. T. Ely, S. N. Patten）のうちに、制度学派として、しられるにいたることを運命づけられた学者がいた。この重要な智的役割にえらばれたのが、T・B・ヴェブレンであった。……いわばアメリカの経済思想におけるルネサンスの精神的指導者としての運命——一九世紀の経済学的正統派にまともにとみかかるとを担っていた彼であった」と。（Op. cit., p. 31）しかしながらこのような運命を担っていた彼は、自己の集団的な伝統をうけ入れることができません、いわば懐疑的であり、芝居じみた性癖をもって人世の裏面を主張し、実際問題の鑄型のなかなげこまれていないすべての理論を不遜に無視する（p. 66）。（“The Development of Eco-

conomic Thought; Great Economists in Perspective”, 1952, Ed by H. W. Spiegel, “Mitchell on Veblen”, pp. 378—402)

ともかくもグルウチー教授がいうように、制度学派の創始者としてのヴェブレンをそのようにアメリカ経済学のルネサンスの位置において理解を求めようとすることは、シムムペーターのいわゆる二つの運動曲線をめぐってわれわれが提起した二つの問題意識をめぐ

って思想的・方法的に考察されることによって価値づけられなければならないものではなからうか。われわれは最近この問題意識に興味深くも接近しようとする試みをもったナテインガム大学(University of Nottingham)のA・W・コーツ氏の「ヴェブレンの方法論の影響」(“The Influence of Veblen's Methodology”, The Journal of Political Economy, Vol LXII December No. 6)なる論稿にふれることができた。けれどもコーツ氏が指摘がなしているヴェブレンの思想的強調点が四つの点—(一)変化(経済的動態および景気

循環)、(二)発生的方法、(三)社会心理および(四)経済学の自立性および他の社会諸科学の独立性—にあってと考えられるならば、それら四つの統一体としての科学方的論は、アメリカ経済学形成への性格的な影響としてどのようなであったかが検証されねばならないであろう。われわれはこのような観点からこのコーツ氏の論稿をとりあげ紹介し、ささか私見を附記してみよう。

一

われわれはまずA・W・コーツ教授の冒頭の所論をうかがってみることに、よってこの論稿の意図を把握し、かかる必要があろう。教授は、最近アメリカの社会哲学思想に対するT・B・ヴェブレンの貢献をとりあげ、つかづいている論稿で、注目すべき展開がなされ、おり、しかも比較的批判的な見通しが一般になられてきているように明らかに考えられる(David Riesman, “Thorstein Veblen”, New York, 1953, pp. 211—214)に著者目録があることを指摘する)と述べてい

る。そうして今日迄アメリカ経済学に対するヴェブレンの影響をとりあげている文献のうち、比較可能な論議の展開とか、あるいはそのような傾向というものがなかったけれども、まさにこのことは新しい一つのヴェブレン解釈を暗示するものではなからうかと結んでいる。ところでこの再評価の問題提起をなしたが、まさしくA・グルッチー教授の「近代経済思想」なる著書である。（コーツ氏はここでD・リースマンによって看過された有意義な貢献はL・ドブリアンスキーLeo D. O'brianskyの未刊の論題「ソースタイン・ヴェブレンの社会学体系」〔The Social Philosophical System of Thorstein Veblen〕, New York University, 1950, であるという）したがって本稿は、アメリカ経済学に関してヴェブレンの影響がかえりみられなかった点に論外として、ヴェブレンの方法論が、生命力を再現するところのものを概説することによって問題を提起するとその態度を明らかにする。そのためには、まずヴェブレンの方法論の本質の様相を描写する必要からし

て、(一)に彼の先入見 (preconception) を検証することが必要である。(二)はそれらの先入見を、彼が正統派経済学者に帰せしめた先入見と対照して見る必要がある。以上二つの事が明らかにされることは、自からいわゆる古典派と新古典派の著者達の「見解の科学的観点」との本質的な相違点を明確にすることであるし、またヴェブレンが経済学をいわば近代的「進化論的科学」として提出したその意味内容を鮮明にすることも可能であるだろうと考えられると述べ、以下三節にわたって論述を試み問題意識を鮮明にすることに努力している。われわれはコーツ教授の論述をなるべく忠実におつてあつて紹介してみることとする。

二 ヴェブレンの批判

正統派経済学に関するヴェブレンの比較的初期の正面攻撃の論議意見のうちになされている詳細な問題提起を、ここで評論することは不可能であるが、ともかく重要な概観を描写していくうちに、初期の批判にお

いて看過された若干の有意義な点が、検証されるであらう。とりわけこれらの諸点は、ヴェブレンと同時代の人達の態度に彼の方法論の影響を関連した場合に検証されるであらう。

周知のように、ヴェブレンは古典学派ならびに新古典学派の経済学が旧式な先入見に基底づけられていたということを中心としたのであった。(註) この点についてゲルッチー教授は前掲書の「マーシャルの基本的仮設についてヴェブレンの批判」において詳細な論述をなしている。

……浜崎)とところでその旧式なそれというのは、ヴェブレンが「物活論的」(“animistic”)とか、あるいは「目的論的」(“teleological”)とか呼んだものであって、その結果科学は分類学的(“taxonomic”)であつたところのものであるし、そうしてその方法において主観的なものであつた。¹⁾要約すると「物活論」という言葉は、経済学者がその言葉自体を自然に帰した、いわば準精神的性格に関連したものであるし、そうして「目的論」は、終局的な目的ないしは極致に向つて、合目

的に方向づけられたように、自然法則を観察するものとしてそれらの傾向に結びあうのであつた。後者の様相——しばしば経済的変化の「改善的」(“meliorative”)意向とよばれた——は、ヴェブレンが強力に主張した「個個的目的論」(“individual teleology”)——人間性質は合目的に動機づけられている——に反対のようないわば「宇宙論的目的論」(“cosmological teleology”)とよばれたかもしれない。人間の動機と関連してヴェブレンは、「快楽的」(“hedonistic”)心理の不適當性について、特殊な強調をなすのである。また彼は、経済学者達によつてその快楽的心理の否認を促したこの原理に彼があびせかけたしなびれた軽べつについて同様特殊な強調をなすのである。

ところでヴェブレンの見解においては、事実についての技術的考察、ならびに人間動機の快楽的な考察が連結されていたのであつた。というのは、人間は連続における機械的媒介者である他は、事実において破棄しがたい、いわば改善的傾向を与えられているからで

ある。²⁾ 快樂主義と目的論とのかかる連合でもってヴェブレンはその快樂的根源を掘り下げることによって、正統派経済理論の壮大な構造を挫くことをひそかに願ったのであった。それは彼がジェムス(James)およびマクドガル(McDougall)のようなかような指導的な同時代の心理学者達によって助成された仕事であったのである。しかしながら、そうすることにおいてヴェブレンは、ただ単に経済発展の目的が与えられたという漠然とした觀念ではなく、この発展の過程における仲介的段階が、また変改しがたく前もって定められていたという、より一層嚴密な概念を経済学者達に帰せしめていたのであった。というのは人間が、経済的变化の過程に影響するのに無力である機能的媒介者になるのは、ただかような状態においてのみであるからである。たとえ改善的傾向の比較的漠然とした概念について強力な跡づけが、たとえばJ・B・クラーク(J. B. Clark)の著書におけるように識別できるとしても、かような概念が、かつて立派な経済学者によ

って擁護されたことがないということを論証するのは、簡単な仕事であるはずである。かようにして、快樂的理論に関するヴェブレンの考察が、誇張されまた歪められていたのみでなく、彼の目的論についての解釈に対するその快樂的理論の關係は、非常に簡單化の度すぎたものであった。

認めがたい極端な手段に、彼の批判をおしすすめるヴェブレンの習性は、正統派経済学者達が「データの常態化」の罪があったという彼の主張によって、なおさら例証されるのである。そのより無害な型において、このことは「推測の歴史」(conjectural history)に予想された「常態」の関連において過去を曲解する行為に導いたのであった。その「推測の歴史」の結果は、ヴェブレンにすればせいぜい「無害でしかも優美な誤報の性格のもの」であった。³⁾ しかしながらこのこと以上に、ヴェブレンは一層重大な非難を課したのであった。すなわちその非難というのは、経済学者達は、實際の經驗を超越したところの現実として、自分

達の理論的構造を考えるにいたつていたということである。そこで儀式的必然のこととして順当に惹起しなければならぬ説明が、この方法において事実問題の考察のために起つてきているのである。

この論争を強める重要な事実が明らかに存するのである。正統派経済学者達はしばしば競争、常態および均衡の概念を説明して来たのであった。それは単に観察した現実を分析し説明する目的にとつて企てられた論理的手段としてでなく、経済組織の現実的固有性としてであつた。そうすることにおいて、それらの諸概念は、概念の論理的意義と経験的意義との區別を明白にすることに失敗したのであった。もしもヴェブレンが、彼の批判の充分な方法論的内容を追求していたとしたならば—この手ぬかりが、それらの政策的諸判断に影響していた範囲の究明をひきうけるが—彼は注目に価する貢献をなしとげていたのであつたが、ともかくも、彼は元來比較的広範囲な思索にかかわつていたのでこの典型的な学研的責務を見うしなつてしまつた

のであつた。

いわゆる演繹的方法ならびに帰納的方法のヴェブレンの明白な放棄は、後続の人人を一層当惑させ、またひとしく展望させたことは、疑う余地のないことであつた。ヴェブレンの演繹的方法についての批判は、演繹的理論家が通常自己の理論的体系を経験的検証に定立することに失敗したという周知の主張になつたか、あるいはそのように行う場合に演繹的理論家は、彼が「拡乱の原因」から結果する「非正常な場合」としてそれらを注目することによつて、自己の理論的公式に従わない事実をよごんで棄却したところの彼の予想した「関連」の基準に、しばしば非常に心をうばわれるということに通常失敗したのであつた。⁵⁾でもヴェブレンは、演繹的方法に対して自己の立場を一貫して主張しなかつた。それにもかかわらず古典派の著者達の先入見と同様な先入見である「自然権」で装われていたカール・マルクスの労作を論議する場合に、ヴェブレンは、なおマルクスの宣伝的目的がなんらかの本質的

方法において、彼の研究および思索を科学的真理の正確な追究からゆがめていたということが、主張されていかなかったし、また事実信じられてもいないということを観察したのであった。マルクスの社会主義的偏見は、彼の論争を色づけするかもしれない、しかしながら彼の論理的支配力はあまりに手ぎわがよく、そうして彼の形而上学的先入見のそれとは別な、彼の理論的作業に影響するなんらかの偏見の許容にとってあまりにも確実である⁶⁾。

このことは、われわれを注目すべきディレンマに引きやるのである。すなわち科学的真理は科学者の基本的な先入見を問わずに擁立されることができるということを、われわれは断定するかということである。もしそうとすればその苦痛は、古典的経済学に関するヴェブレンの批判からとりのぞかれるということは明白であるはずである。一方もしこの解釈は、ヴェブレンの正面攻撃の充分な重点が「前ダーヴィン主義者」の著者達の先入見に対してしむけられたいわば基礎につ

いて否認されていたならば、いかにして科学的真理は常態化ないし宣伝化することから区別されるべきであるのか。ヴェブレンは、科学的真理は単に論理的一貫性の事柄であるということを意味するように考えていた。そのような場合においては、科学的真理は、結論が現実生活の事柄にとってなんらかの關係をもつかどうか、あるいはそうでないかどうかの些細な問題になるのである。

ヴェブレンの批判におけるこの矛盾は、彼の社会主義的ねらいに対するなんらかの同情によるよりも、むしろ経済的諸制度の累積的变化の理論を展開するマルクスの企てにたいするヴェブレンの同情によるものであった。ヴェブレンが、科学的真理の追究に無縁であるとして経済的生活事実を注視しなかったというのは、新古典派経済学の分類学的方法の放棄からして明白である。彼は次のようにいっている。すなわち「分類学」は、因果的分析に課せられたような単なる「定義や分類」を表示する。そうして分類的科学でもって

「科学のすぐれた真理やあるいは法則」は、仮設的諸法則を存続するのである。したがって科学的な現実の検証は、仮設的諸法則と一致するのであって実際の事実―すなわち経済生活の事実―と同時発生的ではないのである。⁷⁾

もしもこのことによつて、ヴェブレンが分類的科学の仮設的法則は、實際的な事実に関連することによつて有効ならしめられるべきであるということの意味したのであるならば、彼は単になんらかの種類の帰納的検証を欲求していたということは、明白なことであるのだが。それにしても、彼は経済学の帰納的科学という素朴な要望を支持しなかつたのである。事実、彼はドイツ歴史学派の経済学者達による帰納法の使用をすどく批判したのであった。ところでドイツのそれらは、いわばその学派の活動力を束縛した総体的に広範な研究および学識の領域が首尾一貫した場合に、その歴史学派の経済学者達は、彼等自身デ・マの列挙でもつて満足していたし、しかも産業発展の叙事的考察

で満足したし、またなんらかの理論をばしいて提供しでもないなかつたし、あるいは知識の首尾一貫した体系にそれらの諸結果を作り出すことも假定していなかつた。という理由でもつて、現存科学の概貌を一般に瓦解するという推断をなすことによつて、ヴェブレンはこれらを批判したのであった。⁸⁾

周知の経済学的方法についてのヴェブレンの大ききばな非難は、彼の著書において非常に固執して宣伝されたし、また発生的方法の許容のためにその手段を準備する計画をなしたのであった。彼の破壊的正面切つての批判が、彼と同時代の人人の間に当惑の感を惹き起したということは明らかである。だからその限りにおいて、彼と同時代の人人は成功したのであったし、また正統派経済理論における教義を掘り下げる傾向に あつたのである。もしもヴェブレンが細工のできる代替的な方法論を準備することができなかつたならば、彼の讚美者達は、いかなる体系的方法に対しても固執していただろうということが、同様にいえるのであ

った。この程度にとつてH・ダヴンポート (Herbert Davenport) のひやかしの明言——「最後審判の日に、人間は非常に多くの見込みのある理論家達を傷つけてきているために自分の創造主に対して考慮をほらわなければならなかったはずである」——については重大な正当性がひそんでいるようにおもわれる。

註(1) ヴェブレンの主要な方法論的著書としては「近代文明における科学の地位」(“The Place of Science in Modern Civilization”, New York, 1932)のリプリントやそれ論稿のうちにみられる。

- (2) Ibid., p. 157
- (3) Ibid., p. 184
- (4) Ibid., p. 125
- (5) Ibid., p. 67
- (6) Ibid., p. 410
- (7) Ibid., p. 164
- (8) Ibid., p. 58
- (9) ジョーゼフ・ドーフマン (Joseph Dorfman) の「ノースタイン・ヴェブレンと彼のアメリカ」(Thorstein Veblen and His America, New York, 1934) の三十一頁によつて引用した。

三 ヴェブレンの積極的提案

ヴェブレンの積極的な方法論的提案は、進化的科学と前進的科学的との相違についての彼の考察を通して、都合よく究明されることが出来る。彼は、それは科学者の本質的に相反する二つの時代における観察の精神的態度、あるいは特質の相違であると主張したのである¹⁾。かようにして観察についての近代科学の特質は、大いに機械技術の結果であつたのである。そのことを彼は次のように言及したのである。すなわち「慣例やそうして慣例によつて伝えられた因襲的規準に頼っているそれらの厳密な規範の看過に対して、不分明なしかも非個人的原因および結果の関連において思考することを注入する²⁾」ことであると。

正統派の経済学者達は、前もつて心にかいた「常態」の関連において彼らのデータを分析したに反して、かような誤謬は進化的科学者達によつて犯されはしなかつたのである。ヴェブレンは次のように叙述し

ている。すなわち「進化主義の指導的人達のすぐれた功績は、一面諸現象の公平な連続の背後を究明することに対する彼らの拒否のうちにあり、しかも諸現象の終極的な総合のためにより高度な基礎を探しもとめるのである。他面そのように考察することにおいて、そのすぐれた功績は、原因と結果のこれらの偏見のない連続が、どうしてその累積的性格によって理論一般を使用することができたかを問題としていることである」と。

ヴェブレンは、原因の直接的観察を主張することをしなかった。けれどもこの考えは、最近彼に帰せしめられている。なるほど彼は、形而上学的前提を廃することを試みてきたために、若干の経済学者達を批判したのであった。近代科学の中心的原理―因果的系列あるいは継続性―は、観察の事柄ではないし、そうしてまた諸の事実の所為にした特性のようなものを除いて観察の事実について主張されることはできないのである。それは科学者、あるいはその他の人人によって論理的に必然な事として、また事実の観察の体系的知識

の基礎として充分に帰せしめられているのである。近代科学においてはこのことは、非難過程の結末であった。しかしながら古典学派の経済学者のようなかような前進化論的科学においては、「非難の第二の程度」と呼ばれるようなものがあつた。すなわち観察した諸現象は、連環されることを心に描く、いわば因果的系列をこえて存在する経済的適法の絶対的なきも明確な基盤に依存するものであつた。窮極的分析においてこの「非難の第二の程度」は、合理性に対して定められた役割の結果として惹起したのであつたし、そうして「完全理性」の原理との関連において表明されたのであつた。ヴェブレンは、この点に關して次のように述べた。「この原理は未来の思想を把握したり、あるいはこの未来について関心をはらうことによって、人間の現実的活動を導く行為者の興味のある識別力の方法によつて―先慮 (Forethought) ―伝わるのである。

……それは単に智的、主観的、個人的なそうして目的論的な性格ならびに勢力である。対照によつて「動因」

（あるいは「原因と結果」の方法論的原理を含んでいる近代科学者によって採り入れられたる非難の方法は、反対方向においてのみおよぶのであり、そうしてそれはただ単に客観的、非個人的、そうして物質的性格ならびに勢力についてである。概して近代知識の図式は、その図式の明白な根拠について原因と結果の關係にたよっている。すなわち完全な理性の關係は、暫定的のみ承認されてきているしまた分析における近似の要因として承認されてきている」と。

ヴェブレンは、ダーウイン主義者の規範のもとに、人間の推論は論理的あるいは智的な勢力以外によって大きく支配されるということが擁立されなければならぬ、ということを強く論争するいわば社会変化に対する人間理性の独立な貢献を軽視することを懸念していたのであった。⁸⁾ダーウイン主義者の規範の最も鮮明な例証は、首尾一貫した唯物論でなかった経済変化に関するマルクス理論のヴェブレンの排斥によって提起されるのである。だからそのマルクス理論は、階級斗

争の関連においておしすすめられたのである。マルクス主義者の観点は個人的であって、非個人的ではないのである。すなわちそれは、事実のうちに「理性の連続性とそうして論理の連続性を必然的に」探究するのである。いわばマルクス主義の観点は、本質的に智的な連続であるし、しかもまた目的論的性格についてのものである。しかるにダーウイン主義の科学者は、傾向もなく、終局的限界もなく、また極致も存在しない無分別な累積的因果關係の図式を用いるのである。その連続は、粗暴な因果關係の *vis a tergo* をのぞいて、何ものによっても支配されないし本質的にメカニカルなものである。⁹⁾

かようにしてヴェブレンの体系は、社会的ダーウイン主義 (Social Darwinism) の極端な型態をふたたび演ずるのである。すなわち遺伝ならびに環境の諸勢力が、人間の合理性を起えて首位を与えられているという社会理論の型態を再演したのであった。¹⁰⁾ 人間的な先慮に対する支配的役割を示摘した文化的変化につい

ての諸理論を批判することにおいてヴェブレンは、

変化の過程について高度に決定的な見解を採用するよう
にみえた。すなわちその見解とは、いわば単なる

「機械的媒介物」のような人間の快樂的概念に対して表
現した彼の反対物と奇妙に矛盾したものであった。ヴ

ェブレンはL・シュナイダー(Louis Schneider)が指

摘したように事実の連続に対して秩序あるいは調和を
帰せしめていたこれら諸理論を非難することにおいて

科学的体系の組成を可能にする推理能力をかえって非
難していたのであった。¹¹⁾ というのは、これらの理論は、

斉一性の理解ならびに事実の複合体の中に調和の理解
を本質的に基礎づけているからである。この気持から

して、人間理性に関するヴェブレンの非難は、科学の
真実な基礎についての非難にも等しかったのである。

なお、もし変化の過程が盲目的であるならば、変化の
過程についての科学的理論は、いかにして傾向のない

論証を概念的に可能とするかを観察することは困難で
ある。だからかようにしてそれは事実上偶然なのである

のである。

ヴェブレンの提起した進化的方法論における中核的
要素は、「累積的因果関係」(cumulative causation)の
概念であった。彼はこの点について次のように論述し

た。すなわち「いかなる進化的科学も、ある過程につ
いての理論であり、一つの展開的な系列の科学である。

そうして課題とされることに対する支配的な疑問は、
何がどうして次に起るかということである」¹²⁾と。諸現

象についてのこの「発生的連続」(genetic succession)
の分析は、歴史的諸現象の系列の単なる叙事的記述で

はなく、「動因」(efficient cause)の関連における
分析であるはずであった。ところがこの窮極的概念は、

綿密に明らかにされなかったのである。しかしながら、
ヴェブレンはどんな諸現象の動因でも直接的に先行の

諸環境のうちに発見されるべきであるということ在意
味するように思えたのである。そうしてこの解釈は

「累積的因果関係」についての彼の説明によって支持
されるのである。彼は次のように論証している。「文

化的変化の過程は各各の新しい事態が、それ以前に起っていたところのものの変異であり、しかも以前に運行していたところのものによってもたらされてきているすべてのものを、因果的要因として具体化するという考え方において累積的である¹³⁾と。いいかえると、すべての制度的事態は、それに先だっていたあらゆるものの産物である。それ故に個個の原因を分離するためになされるいかなる試みも失敗に終わってしまうのである。かようにしてヴェブレンは、すべての事柄がすべての他の事柄によって説明されたところのものうちで「全体」のようなある種の宇宙の「有機的」概念を主張したのであった¹⁴⁾。故にかような考察が、近代的進化概念において「固有の理論」を構成しなかったという彼の主張にもかかわらず、時間関係は、また包含されたのであるし、必然の結果としては、継続的文化的变化の歴史的考察であったのである。ヴェブレンにとっては変化の過程は、単に理論的構成概念ではなく、経験的現実である。すなわち文化的全体の仮の図

式は、もしいかなる試みでも個個の研究にとって特種な部分を分離することをなきしめたとしたならば、与えられるはずである。このことは「分類学的科学」の仮設的諸法則に対する彼の軽蔑的な論及を説明するのに設立つのである。したがってヴェブレンは、彼の進化的科学は、かような技術的抽象を回避すべきである¹⁵⁾ということを明白に考えていたのであった。

しばしば指摘してきているように、ヴェブレンの体系において真に動的要因は技術的变化である。それにしても彼は、いかにして技術は変化したかの妥当な理論を準備していなかったのである。彼は明らかに、技術的進歩にとって「他愛もない珍物」(idle curiosity)の非実用的な本能的衝動の偶然的寄与を論議した。しかしながら人間に基づく技術的衝撃について彼のダーウィン主義的先入見は、技術に関する人間の衝撃のかんがりの軽視にみちびかしめるのである。結果的には、技術的变化に関する彼の理論は、連続性の原理に欠けていたのであった。したがってL・ハニー

(Lewis Hancy)が、そのことを適當に指摘したようにヴェブレンの思慮は、「絶えず変化する環境について間絶のない变化的記述」¹⁶⁾であるように思えるのである。このことは幾分か、事実の類型における傾向と体制 (trend and order) との間のヴェブレンの混乱の結果であつたし、また目的論的誤謬を避けるために彼の必死の欲求の結果でもあつたのである。事実、彼はしばしばダーウイン主義的タイプの理論のもとに、不変な法則は可能でないという印象を与えたのである。そうしてそれにもかかわらず、科学が必然的に斉一性および法則の関連においておしすすめられねばならぬといしばしば自己の主張をひれきしたのであつた。彼は論理的变化的体系は、变化的宇宙を説明するために要請されるという若干の現代の実用主義者の意見にあづかるようにみえたのである。¹⁷⁾かようにして、ヴェブレンは事実、変化がいかにして起つたかの發生的(歴史的)考慮の代りにもたらしいわば変化の性質の説明を提起していなかつたのである。

ヴェブレンが主張した進化的方法論の充分な意義を理解するために、知識についての彼の文化理論を簡単にながめることが必要である。ところで変化する技術および「思想の習性」のうちに結果的に起る変化とともに、科学の新概念の発展にこつて、指導的な「妥当性の規準」においては附随的な諸変化が存在したのであつた。けれどもヴェブレンは、この変化の過程は、漸進的であるということを主張したのであつた。彼は形而上学的先入見の相異なる状態に基礎づけられた二つの知識の体系の間に、比較的根柢は存在しないという峻烈な結論をそれから導いたのであつた。¹⁸⁾なお知識の素材におけるよりもむしろ知識の素材を取扱う方法が本質的な相違として、とりあげられた事実の評価の根柢をより高度な綜合のうちにおいているのである。¹⁹⁾いかなる経験的検証によつても、他方を起えて一方の優位を擁立することは明らかにできないことであつた。それにしてもわれわれが、経験的領域から推理的領域へ移向する場合に、相異なる先入見に基礎をおいた他方

の知識体系を起えて一方の知識体系の優位をいかにして実証するかの問題は解決できないのである。というのは、ヴェブレンの認識したように、進化的科学の中心原理は—すなわち「累積的因果的系列」の概念—立証されないしまた立証しがたい仮定であるのである。²⁰⁾

かようにしてヴェブレンの進化的方法論の見せかけの優位性は、合理的根拠によって実証されないものであった。すなわちそれは文化的発展の現段階とともにその進化的方法論の中心的先入見の広範な一致—仮定上自明であったところの一致—のうちに単にすえられてゐる。事実、知識体系あるいは命題の厳密性は、それが形成される周囲の諸事情に依存するところにしたがつてヴェブレンの完全な研究は、知識社会学 (Wissenschaftslogie) の素朴な型態を再提起したのであった。²¹⁾ 彼の極端な相対主義的モデルにおいて、支配的文化的類型における時代の諸変化は、厳密な科学的知識のなんらかの継続的体系の固執を完全に排除すべきであつたらう。なお、科学的理論はその先入見の批判に抵抗

することができなかった。というのは先入見が批判されてくるや否やそれは多かれ少なかれ変化した新しい形態によってとって代られるためである。なぜならばそれについての批判は、基本的原理として役立つことが求められている思想の習性の変つた複合体において、変化しない複合体を存命することはもはや適しないと、いうことを意味するのであるとヴェブレンはいつてゐる。²²⁾ 正統派経済学の先入見に関する彼の非難のつくりつけの正当化を、かように主張することにおいてヴェブレンは彼自身の運命を定めたのであった。また事実一切の他の科学的体系の運命を決定したのであった。このことはたしかに科学的相対主義の帰謬法 (reductio ad absurdum) であつた。

ヴェブレンの方法論的提案のこの分析を推断することにおいて、若干の関心が以下の彼の欲求にはらわれなければならない。すなわち前進化的科学は、主観的個人的であつたけれども経済学の進化的科学は、客観的でしかも非個人的であるはずだという主張がそれである。

この相違はある点まで背馳する基本的な先入見から生じたのであった。しかながらヴェブレンの著書における「客観的」なる言葉の種種の合意は、区別される必要がある。というのはそれらの合意は、論理的意義は勿論実践的意義をもっているからである。

まず第一に、主観的と客観的との区別は、分析の心理学的標準に関連するのである。社会的心理学における現代の諸発展と調和してヴェブレンは個々の意識、および人間の性質に対する客観的行動主義的接近に代って採用している（人間個人の）内省的方法についての強調を拒絶したのであった。²³⁾ 合理的活動に対する論及は、「習性」やあるいは「本能的衝動」に根拠をおいた研究を軽視すべきであった。だからヴェブレンの体系において、人間行為は、しばしば人間の支配を超える変化的な外部の勢力に対して、ただ単に本能的な適応の継続であるようにみられたのであった。

第二には、方法論的標準について、社会に対する主観的研究と客観的研究との区別は社会的行為者の主観

的役割とそうして科学的観察者の客観的役割との相違を必要とするのである。——M・ウェバー(Max Weber)によって強調された重要な区別である。——ウ

ェブレンは科学的観察者にとって適切な見解および概念が、日常生活のそれらから全く異っているという事実を完全に無視したのであった。そうして彼は、以下の叙述の意味から正統派経済学者達を批判したのであった。すなわち「活動を導く人人が、彼等自身活動の瞬時に自分達の活動を理解するということにおいて起っている」²⁴⁾「それらのカテゴリーから、相異なるカテゴリーを使用して理由からして批判したのであった。

この方法に科学者を制限することは、例えば近代理論物理学において発展した多くの諸概念を排除することであらう。あらゆる（経験的）科学は、日常経験の素材でもって開始するのである。しかしながら体系的科学的命題が形成されうるというのは、これらの素材についての詳述を超越することによってのみなされるのである。このことの認識に対するヴェブレンの失敗は、

いけば社会に対する彼のダーウイン主義的接近の非妥当性のより明白な証拠である。

ついにヴェブレンの客観性に関する口実は、彼が経済科学の規範の様相であるべきと考察したものを、逸脱する企てを表明するのである。というのは彼は、経済学者達が「何があるべきか」から「何があるか」を分離することに失敗したということを固執して説明していたのである。これを回避する試みにおいてヴェブレンは、ばからしい好奇心の本能に基礎をおいた科学的知識と、便宜の動機に根拠をおいた言語的知識の實用主義的体系との間に基本的な認識論的二分を導入したのであった。しかしながら後者の知識型態を強調する先入見は、「物活論的」でありまた「目的論的」であったに反して、近代科学的知識は、「非個人的」でしかも「事実の事柄」であったのである。彼は、近代科学が事実の事柄であったという単純な主張は、近代科学者が公平な観念において客観的であるという充分な保証であったということを考えるように思われたの

である。ヴェブレン自身の考慮はこの論争に支持を与えてはいかなかった。「細工の本能」についての彼の定義は明らかに規範的であったのである。²⁵⁾すなわち正統派経済学の明白に立証できないまた出来難い先入見に関するヴェブレンの非難は、明らかに科学的な基盤に根拠をおいていなかった。また累積的因果系列の主張についての近代科学者の非難は、明らかに主観的な方法であった。ヴェブレンの時代の否認者にかまわず、彼の労作のうちには彼が価値判断を形成することから抑制されなかった広範な証拠物が存在するのである。

一例としては以下のようなものである。すなわち経済学者達が、彼等自身の理論の厳密さにとって必悪な条件として現状 (*status quo*) を弁護したというところの彼の主張である。²⁶⁾このことは経済学者が、その事態をそれ自身好ましいとして考えるアイデアとともに経済理論が、近代的取引事情にただ関連があるという歴史的観念の絶望的な拒否を表現するのである。

註① The Place of Science in Modern Civilization, p. 60

(2) Veblen, The Theory of Business Enterprise (New York, 1904, p. 301

(3) The Place of Science in Modern Civilization, p. 61 「原因と結果の偏見のなご連続」といふ言葉の意味および「理論一般」のそれは以下で説明されるであらう。

(4) Stanley Daugert, The Philosophy of Thorstein Veblen (New York, 1950) p. 34

(5) The Place of Science in Modern Civilization, p. 34n.

(6) Ibid., p. 146

(7) Ibid., pp. 237—38

(8) Ibid., p. 441

(9) Ibid., p. 436

(10) T. ニューマンズ (Talcott Parsons) の “The Structure of Social Action”, New York, 1937 chap. vi にまごじなわれた議論を参照

ヴェブレンは勿論「完全理性」の原理を一緒に廃せることを主張したのではなかった。(「近代文明における科学の地位」の二三八頁—二三九頁の論述と比較せよ)

(11) Louis Schneider, The Freudian Psychology and Veblen's Social Theory (New York, 1948) p. 99

(12) The Place of Science in Modern Civilization, pp.

58 and 84

(13) Ibid., p. 242

(14) これは W. J. シュワムス (William James) の意見を強く追想させるものである。(「哲学の若干の問題」 (“Some Problems of Philosophy, New York, 1911, p. 192) を参照

シュワムスは彼自身の見解と J. S. ミルの見解とを較べて平行を指摘したのであった。(「論理学」第八版第一卷三八三頁と対照)

(15) 人間行為の非経済的外貌から経済的外形を明確にすることに對するヴェブレンの拒否は、この誤認の一例である。(「近代文明における科学の地位」二四一頁および七七頁参照) ヴェブレンの「進化的経済学」の範圍は、ここで詳細に検証されることになりなかつた。

(16) 「経済理論に對する制度的研究」 (“The Institutional Approach to Economic Theory”, American Economic Review (Supplement, IX (1919) 320—21) に於ける彼の議論を参照

(17) Morris R. Cohen, Reason and Nature (New York, 1931) pp. 18—20

(18) 「完全理性」と「動因」との両方は、「近代文明における科学の地位」の二三七頁において適格に論述されている。ただし、その意見は彼の “The Theory of Business Enterprise, pp. 343—44 に論及されている

120°

- (61) The Place of Science in Modern Civilization, p. 99
- (62) Ibid., 33
- (63) この意見を強調する誤謬は M・マンデルバウム (Marxice Mandelbaum) の「歴史知識の問題」(“The Problem of Historical Knowledge”, New York, 1938, p. 177) にならば見事に立証されつつある。
- (64) The Place of Science in Modern Civilization, p. 149
- (65) 社会科学における「意識」の役割の重要な点、「経済的心理と価値問題」(“Economic Psychology and the Value Problem”, Quarterly Journal of Economics, XXXIX (1925, 372—409) をよむ「経済的心理における事実と形而上学」(“Facts and Metaphysics in Economic Psychology”, American Economic Review, XV (1925, 247—66) のよむなかからなる論稿にならば Frank H. Knight) により十分に検討されておる。
- (66) The Place of Science in Modern Civilization, p. 178
- (67) Veblen, The Theory of the Leisure Class (New York, 1934, p. 15
- (68) Dorfman, op. cit., p. 365

四 ヴェブレンの方法論の意義

ヴェブレンが方法論的計画においておしすすめることを願った方向のいくらか一般的な、しかもかろうじて指標にすぎないに等しいことは、前述の説明が暗示するけれども、ヴェブレンの方法論的計画は、漠然としていたしまた不完全なものであった。したがって結果において、彼の讚美者達はその性質および重要性について大いに相異なる解釈を採用したのであった。例えば W・ミッチェル (Wesley Mitchell) は、ヴェブレンの進化的方法は、彼に先だつ著者達の方法から意義的に相違していなかったということを明白に考えていた。ところで先だつ著者達の方法とは、ヴェブレンの労作の特色のある様相が、その主題の目的ならびに性格の概念および命題から生成したということをつけ加える方法である。¹⁾ アメリカ経済学に対するヴェブレンの貢献を主張する企てにおいて、比較的最近 A・グルッチーは、ヴェブレンの労作は、彼の進化的経済学

に対して最も適切であるはずであるならかある種の分析方法の完全な欠如からなやんだということを確認したのであった。⁹⁾ 一

ともかくもアメリカ経済学その後の発展に関するヴェブレンの方法論の影響を否定することは、ひどく誤っていることである。けれどもデカルト、ヒュームおよびC・S・ペアース(Charles S. Peirce)等による経験に富んだような疑惑的先入見についてのヴェブレンの技術は、正統派経済学に関する嫌厭や体系的理論の疑惑を感得させたのであった。それは基本的問題を再び考察するために色色違つた意見の経済学者達を強制したのであった。生成した科学的方法の性格ならびに限界の正当な理解を維持した経済学者達はこの厳しい試練によって清新した以外に精錬したのであった。ともかくも比較的若い多くの経済学者達は特に経済理論においてそれらの基本問題を不適當に養成したのであった。それらの人人は人間個々の平等および個々の環境にしたがう諸成果——ヴェブレンの烈しい非難は

種種の形態をとつたところの崩壊的な影響に作用したのであった。——に関する熱望ならびに抽象の辛抱出来ない人人であった。

進化的経済学の了解可能な体系的な方法論の欠陥のために、「制度主義者達」は、固定性のある学派の代りにヴェブレン流の弟子——教理についてのヴェブレン自身の解釈と調和する人人——の異質なグループであった。かようにして門人であるよりもむしろ讚美者であるWミッチェルは景気循環の本質的に経験的ながらも統計的な研究に向つたのであった。いわばヴェブレンの影響によるよりも、個人的好みによつて一層ミッチェルがひきつけられている方向にとつての手段を用いる景気循環の研究に進んだのであった。ミッチェルの「量的経済学」(quantitative economics)についての計画は、基本的にヴェブレンの体系の百科辞書の傾向と両立しなかつたのである。ところでヴェブレンのそれというものは、数量についてそれらの能力にかかわらない文化的環境に関するあらゆる外貌を包括するもので

あった。体系的理論から比較的差し迫った実践的問題へ意識的に避けた弟子であるR・F・ホクシー(Robert F. Hoxie)は、ヴェブレンの方法よりはすくなくとも野心的であった「歴史的方法」を言明したのであった。ゆえにその方法は、データの源泉および性格においてのみ「科学的研究の通常の方法」から相違したのであった。⁴⁾ いま一人の有力な制度主義者W・H・ハミルトン(Walton H. Hamilton)は、研究の対象は純粋な文化的環境に対するそのヴェブレンの方法の関連において検証されるべきであるところにしたがって「有機的自己心」の方法を案出したのであった。⁵⁾ この方法は、労働組合、法人あるいは価格体系のような統一体が正統派経済学者によって用いられた概念よりも、とにかく一層現実的であった誤謬の観念に向上を与えたのである。そうして種々な関係を包含している理論的意義を主張することを全然試みていないか、あるいはわずか試みるかでもってその環境にとつて与えられた有機体をとリまく、あらゆる要因やあるいは機能の

徹底的な(しかも論理的に不明確な)リストの検証に導いたのであった。結局制度的系統を明らかにすることは、より困難であるとする経済学者J・M・クラーク(John Maurice Clark)は彼の父J・B・クラークよつて暗示された経済動学の諸問題に転じたのであった。そうして経済理論がその前述の言によつて限定された領域の理解のために、ヴェブレンの探究に科学的方法の彼の(クラーク)正しい把握を適應することを試みたのであった。⁶⁾

若干の最もすぐれたヴェブレンの讚美者達は、彼の輝しい洞察力および彼の素直な理解に敬意をはらつたのである。しかしながらまた、あまりに巨大な彼の哲學的領域をみいだしたのであった。したがつて彼等は、ヴェブレンの価値を低下している通り名のいくらかは、彼自身の労作にとつて等しい勢力を適應したということとをいかがわしく思つてきたかもしれない。体系的進化的方法論の欠如は、別としてアメリカ経済学についてのヴェブレンの影響における最も重大なそれは、政

策的主張についての彼の回避のうちにある。「便宜の
準則」(maxims of expediency)あるいは「世才」

(worldly wisdom) に関するヴェブレンの嫌厭は色
色の成累をえることを、すなわち実践的諸問題を解決
することを願うそれらの門人達に万足を与えなかつた

のである。しかしながらここに実用主義者とくにJ・
デューイの「道具主義者的」な支持者達はその裂け目
にあゆみ入ったのである。すべて想像可能な問題を提
供するために、政策的忠告でもってしかもまた経験

——事物を徹底的にテストする気持において——およ
び社会的支配に関する強調でもって、道具主義者達は
一九二〇年代の制度主義にとって目的ならびに内容を
与えたのであった。変動(movement)についてのヴ
ェブレンの支配力は、漸次減少したのであった。すな
わち「固有の理論」および非実用主義的な「ばかばか
しい好奇心」についてのヴェブレンの比較的初期の関
心は、「モノグラフイクな原子説」⁷⁾および「機能的」
あるいは「経験的」経済学へと曲解されていったので

あった。⁸⁾ 正統派経済理論にとって代る体系的な制度派
経済学における興味ならびに要求は、おとろえたので
あった。⁹⁾ そうしてほとんどの経済学者達の関心は、不
完全競争や経済変動の理論や問題によって示唆された
新しい事態へと転じていったのであった。

アメリカ経済学に対するヴェブレンの貢献のすべて
を包含する意義をここで論述することはできなかった。
けれども彼の作業がより広い背形との関連において判
断されねばならないということは明白である。そのこ
とのうちにヴェブレンの基本的な強調¹⁰⁾と実用主義の中
心原理との結合が強調されねばならないのである。方
法論的立場からヴェブレンの影響は、彼の批判の破壊
的な衝撃に帰せられうるのである。彼の構成的計画の
欠陥は、政策的忠告とそうして現実のさしせまった諸
問題の解決に関する道具出義者の魅力にむかう彼の明
白な分離でもって連想されたのであった。経済学にお
ける科学的方法の発展に関連してヴェブレンの貢献は、
高く評価されることはできない。

- 註① Lecture Notes on Types of Economic Theory", New York, 1949, pp. 234 and 232
- ② Op. cit., 56
- ③ Wesley Mitchell: The Economic Scientist, ed. A. F. Burns (New York, 1952) pp. 94—95
- ④ Robert F. Hoxie, "Historical Method versus Historical Narrative", Journal of Political Economy, XIV (1906), 568
- ⑤ Walton H. Hamilton, "The Development of Hoxie's Economics", Journal of Political Economy, XXIV (1916), 871, n. 2
- ⑥ John Maurice Clark, Preface to Social Economics (New York, 1936), p. 94
- ⑦ J. ガンボス (John Gams) の「需要と供給の彼方」 ("Beyond Supply and Demand", New York, 1946, p. 82) おおむね使用された表現である。
- ⑧ A. B. フルノト (A. B. Wale) と R. G. タグウェル (R. G. Tugwell) の共著書「経済学の傾向」 ("The Trend of Economics", ed. R. G. Tugwell, New York, 1924) の中の両者の論稿を参照
- ⑨ F. M. バーンズ (E. M. Burns) の「制度主義は正統派経済学でもって補足しあるいは競争するか」 ("Does Institutionalism Complement or Compete

with 'Orthodox Economics?'. American Economic Review, XXI (1931, 80—87) を参照) ・ R. コモンズ (John R. Commons) の「正統派経済学に対する補足として彼の『制度の経済学』 ("Institutional Economics", New York, 1935) を著して云々。

⑩ 以下四項目がウェンソンの基本的強調点として考えられることがわかる。

(一) 変化 (経済的動態は必ず量変循環) (change economic dynamics and business cycles)

(二) 発生的方法 (genetic method)

(三) 社会心理 (social psychology)

⑪ 経済学の独立性をよび他の社会科学の独立性 (the interdependence of economics and the other social sciences)

附 記

以上われわれは、A. W. コーツ教授がヴェブレンの方法論をめぐる問題意識を鮮明するためになされた二つの課題、すなわち(一)ヴェブレンの科学方法論の根拠をなす先人見の検証。(二)彼のその先人見と正統派経済学者の先人見との対比。(ゲルウチーは、前掲書で、ヴェブレンが A. マーシャルの「経済学原理」

めぐってなした批判、特にマーシャルのノーマリテイ
ーの先入見についての批判を均衡理論にかかわらして
展開したことを詳細に論述しているが、これらの両者
をめぐっての論述を紹介しながらも、われわれは古典
派ならびに新古典派の経済学の「見解の科学的観点」
とヴェブレンのそれとの相違点の認識の必要という門
口に自ずから立たされていることを識らねばならな
った。それにしてもコーツ教授のこの論稿で展開さ
れた論述にしたがえば、ヴェブレンの方法論のアメリ
カ経済学への影響は、まさに消極的なものとして評価
されねばならず、かえって、プラグマチズムの道具主
義者の原理への結びつきという立場において、積極的
考へに価値づけてる必要があるのではないかというこ
とを暗示する。そのことは一面、経済学史家が制度主
義学派をヴェブレンを起点として、J・R・コモンス

(John R. Commons, 1862—1944)・W・U・

ミッチェル (Welsey Clair Mitchell, 1874—1948)・

S・パールマン (Selig Perlman, 1888—)・A・F・ズ

T・B・ヴェブレン方法論の論難 (浜崎)

ーンズ (Arthur F. Burns, 1904—) 等の経済学者を
いわゆる学派の型において包括しようとすることは危
険であると指摘するやに考えられる。その意味では制
度主義学派としてのヴェブレンの価値づけを企てるこ
とは、まさに不適當といわねばならないであろう。こ
のように考えてくるとシユムペーターのまゝに述べた
制度学派の二つの運動曲線なるものも果して抽象的形
態においては基本的な曲線としてそれらの経済学者達
に存在するのか、否か、あるいはヴェブレンの科学方
法論の横顔としてのみ見られるのか否かという疑惑が
当然起つてこずには、おかない。